

山田雄司

忍者の歴史



角川選書 570

忍者の歴史

山田雄司

常州大学図書館
藏書章

角川選書

570

山田雄司 (やまだ・ゆうじ)

1967年、静岡県生まれ。京都大学文学部史学科卒業。亀岡市史編さん室を経て、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻（日本文化研究学際カリキュラム）修了。博士（学術）。現在、三重大学人文学部教授。著書に『跋扈する怨霊』（吉川弘文館）、『怨霊とは何か』（中央公論新社）、監修に『「もしも？」の図鑑 忍者修行マニュアル』（実業之日本社）などがある。



角川選書 570

にんじや れきし
忍者の歴史

平成 28 年 4 月 25 日 初版発行
平成 28 年 6 月 15 日 再版発行

著者 ^{やまだ ゆうじ}
山田雄司

発行者 郡司 聡

発行 株式会社 KADOKAWA
東京都千代田区富士見 2-13-3 〒102-8177
電話 0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）
受付時間 9：00～17：00（土日 祝日 年始年末を除く）
<http://www.kadokawa.co.jp/>

印刷所 横山印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

ISBN 978-4-04-703580-5 C0321 ©Yuji Yamada 2016/Printed in Japan

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁本はご面倒でも下記 KADOKAWA 読者係にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。古書店で購入したものについては、お取り替えできません。

電話049-259-1100（9：00～17：00/土日、祝日、年末年始を除く） 〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1

序章

忍者ブーム 8 / 忍者とは何か 9 / 歴史的な忍者の定義 14 / 本書の意図 16

第一章 戦国時代の忍び

一、忍びの起源

古代の間諜 20 / 忍びの由緒 21 / 藤原千方 22 / 『太平記』の忍び 24 / 『峯相記』の悪党 27 / 黒田荘と悪党 30

二、伊賀と甲賀

伊賀惣国一揆 33 / 鈎の陣 37 / 甲賀郡中惣 40

三、「忍び」の実際

「忍び」の定義 42 / さまざまな呼称 44 / 義盛百首 46 / 各地の忍び 49 / 北条氏の忍び 51 / 風間(摩) 54 / 上杉氏の忍び 58 / 武田氏の忍び 59 / 伊達氏の忍び 61 / 朝鮮から見た忍び 64

四、伊賀衆の活動

身体の鍛練 67 / 周辺国での活動 69 / 火術 71

第二章 兵法から忍術へ

一、中国兵法の受容

中国古代の兵法 76 / 『孫子』 用間篇 78 / 兵陰陽 80

二、日本の兵法書の編纂

『張良一卷書』 81 / 修験道とは 83 / 日本の兵法書 86 / 兵法書の内容 92 / 戦国期の

修験道 97 / 寺院と兵法 99

三、軍学書の成立

『訓閲集』 100 / 『軍法侍用集』 103

四、忍術書の成立

兵法から兵学へ 107 / 伊賀流忍者博物館所蔵忍術書 108 / さまざまな忍術書 111

第三章 忍術書の世界

一、忍びとしての心構え

『万川集海』 116 / 忍びとして必要な十の要素 117 / 正心 120 / 忍びの特性 121 / 『当流

奪口忍之巻註』 123 / 生き生きて生き抜く 125 / 『謀計須知』 128

二、忍び込みの実際

忍び六具 129 / 七方出 132 / くノ一の術 134 / 穴蜘蛛 135 / 堀を渡る 136 / 塀を越える
137 / 犬に注意 138 / まさびし 140 / 足跡を残さない 141 / 見詰・聞詰 142

三、忍びの身体

嗅覚・聴覚 143 / 味覚 144 / 視覚 145 / 触覚 147 / 握力 149 / 動物のまね 150 / 身を隠す
術 152 / 飛び降りの術 153 / 食 155 / 薬 158

四、忍具

登器 160 / 水器 162 / 開器 166 / 火器 167

五、情報の伝達

のろし 172 / 五色米 173 / 密書・暗号 175 / 相詞 176 / 記憶 177 / 忍びの概要 178

第四章 江戸時代の忍び

一、織豊期の伊賀

天正伊賀の乱 182 / 神君伊賀・甲賀越え 186 / 服部半蔵正成 190 / 伊賀者の活躍 192

二、江戸暮らしの伊賀者・甲賀者

伊賀者・甲賀者の居住と給地 196 / 百人組 200 / 島原の乱 203 / 御庭番 205

三、各地の忍び

上野城下の忍び 206 / 赤穂事件 210 / 尾張藩の忍び 211 / 松本藩の忍び 214

四、江戸時代の忍術

忍術を使う人々 216 / 名古屋城の忍術家 219 / 忍術道場 220 / 伝授 222 / 忍術流派 225

幕末の忍び 227 / 幕末から明治へ 229

終章 変容する忍者

一、近世から近代へ

忍術と妖術 234 / 近代社会と忍術 236 / 伊藤銀月による忍術研究 237 / 忍術修行 239

さまざまな忍術本 241

二、伝承される忍術

甲賀流忍術十四世藤田西湖 244 / 修霊鍛身会会長藤田西湖 246 / 忍術の披露 249 / 陸軍

中野学校 251 / 伊賀流忍術東日教 253 / 現代の忍術継承者 255

あとがき 260

参考文献・史料 263

忍者の歴史

山田雄司



角川選書

570

序章

忍者ブーム 8 / 忍者とは何か 9 / 歴史的な忍者の定義 14 / 本書の意図 16

第一章 戦国時代の忍び

一、忍びの起源

古代の間諜 20 / 忍びの由緒 21 / 藤原千方 22 / 『太平記』の忍び 24 / 『峯相記』の悪党 27 / 黒田荘と悪党 30

二、伊賀と甲賀

伊賀惣国一揆 33 / 鈎の陣 37 / 甲賀郡中惣 40

三、「忍び」の実際

「忍び」の定義 42 / さまざまな呼称 44 / 義盛百首 46 / 各地の忍び 49 / 北条氏の忍び 51 / 風間(摩) 54 / 上杉氏の忍び 58 / 武田氏の忍び 59 / 伊達氏の忍び 61 / 朝鮮から見た忍び 64

四、伊賀衆の活動

身体の鍛練 67 / 周辺国での活動 69 / 火術 71

第二章 兵法から忍術へ

一、中国兵法の受容

中国古代の兵法 76 / 『孫子』 用間篇 78 / 兵陰陽 80

二、日本の兵法書の編纂

『張良一卷書』 81 / 修験道とは 83 / 日本の兵法書 86 / 兵法書の内容 92 / 戦国期の

修験道 97 / 寺院と兵法 99

三、軍学書の成立

『訓閲集』 100 / 『軍法侍用集』 103

四、忍術書の成立

兵法から兵学へ 107 / 伊賀流忍者博物館所蔵忍術書 108 / さまざまな忍術書 111

第三章 忍術書の世界

一、忍びとしての心構え

『万川集海』 116 / 忍びとして必要な十の要素 117 / 正心 120 / 忍びの特性 121 / 『当流

奪口忍之巻註』 123 / 生き生きて生き抜く 125 / 『謀計須知』 128

二、忍び込みの実際

忍び六具 129 / 七方出 132 / くノ一の術 134 / 穴蜘蛛 135 / 堀を渡る 136 / 塀を越える

137 / 犬に注意 138 / まきびし 140 / 足跡を残さない 141 / 見詰・聞詰 142

三、忍びの身体

嗅覚・聴覚 143 / 味覚 144 / 視覚 145 / 触覚 147 / 握力 149 / 動物のまね 150 / 身を隠す

術 152 / 飛び降りの術 153 / 食 155 / 薬 158

四、忍具

登器 160 / 水器 162 / 開器 166 / 火器 167

五、情報の伝達

のろし 172 / 五色米 173 / 密書・暗号 175 / 相詞 176 / 記憶 177 / 忍びの概要 178

第四章 江戸時代の忍び

一、織豊期の伊賀

天正伊賀の乱 182 / 神君伊賀・甲賀越え 186 / 服部半蔵正成 190 / 伊賀者の活躍 192

二、江戸暮らしの伊賀者・甲賀者

伊賀者・甲賀者の居住と給地 196 / 百人組 200 / 島原の乱 203 / 御庭番 205

三、各地の忍び

上野城下の忍び 206 / 赤穂事件 210 / 尾張藩の忍び 211 / 松本藩の忍び 214

四、江戸時代の忍術

忍術を使う人々 216 / 名古屋城の忍術家 219 / 忍術道場 220 / 伝授 222 / 忍術流派 225

幕末の忍び 227 / 幕末から明治へ 229

終章 変容する忍者

一、近世から近代へ

忍術と妖術 234 / 近代社会と忍術 236 / 伊藤銀月による忍術研究 237 / 忍術修行 239

さまざまな忍術本 241

二、伝承される忍術

甲賀流忍術十四世藤田西湖 244 / 修霊鍛身会会長藤田西湖 246 / 忍術の披露 249 / 陸軍

中野学校 251 / 伊賀流忍術東日教 253 / 現代の忍術継承者 255

あとがき 260

参考文献・史料 263

序章

忍者ブーム

昨今、忍者に対する注目が高まり、忍者に関する記事を各種メディアでしばしば目にする。二〇一五年には日本記念日協会より二月二十二日（にん・にん・にん）が「忍者の日」に認定されたほか、同年一〇月九日には、日本各地の忍者に関する取り組みを行っている自治体から構成される日本忍者協議会が発足し、二〇一六年には日本科学未来館・三重県総合博物館で忍者展が開催される。

これまでも忍者ブームは何回か起こっているが、今回のブームをどのようにとらえたらよいだろうか。それと大きく関わりと考えられるのがクールジャパンである。二〇一〇六月、経済産業省製造産業局に「クール・ジャパン室」が開設され、日本の文化・産業の世界進出促進、国内外への発信が推進されることとなったが、忍者はまさに「かっこいい」「日本独自」の存在で、クールジャパンの代表たるにふさわしいと言えよう。

また、地方創生が叫ばれる昨今において、今回の忍者ブームでは忍者に関連した自治体がそれぞれ特色ある取り組みをしていることが注目される。これまで映画・マンガ・アニメなどで多様な忍者が描かれてきたが、それらはどこかの地方に固有な忍者ではなかったのに対し、近年では伊賀忍者・甲賀忍者・紀州忍者といった地方固有の忍者を押し出している。戦国時代において忍びは各大名のもとで任務を果たし、江戸時代になってからも各大名に仕えて探索・城下の警備・大名の護衛などに携わった。そのため、基本的に日本各地に忍者が存在していたと

言える。しかし、その活動は秘密裏に行われていたため、必ずしも豊富な史料が残っているわけではない。伊賀・甲賀に関する史料は比較的残されているが、その他の地方においては残存状態にバラツキがある。けれども、これまでは注目されてこずに、まだ眠っている史料が少なからずあるのではないだろうか。今回の忍者ブームで、そうした史料の発掘が進められることを期待している。

忍者とは何か

そもそも、忍者とはどのような存在なのだろうか。以下の忍者に関する定義は、日本忍者協議会において私が中心となってまとめたものである。

忍者は歴史的には「忍び」と呼ばれ、史料上確実に存在が確認できるのは、南北朝時代（一三三六―九二）以後で、その起源は十三世紀後半に荘園制支配に抵抗した悪党にあると考えられる。忍びは、乱波（らっぱ）・透波（すっぱ）・草（くさ）・奪口（だっこう）・かまりなど、地方によりさまざまな名前で呼ばれ、忍者（にんじゃ）という呼び名が定着したのは昭和三十年代になってからのことである。戦国時代の忍びは、各地の大名に召し抱えられて、敵国への侵入、放火、破壊、夜討、待ち伏せ、情報収集などを行ったが、最も重要なのは敵方の状況を主に君に伝えることであることから、極力戦闘を避け、生き延びて戻ってくる必要があった。

伊賀・甲賀地方は京都にほど近く、まわりを山という天然の要害に取り囲まれていることも

あり、大名勢力が弱い一方自治が発達し、一揆を形成して武装していた。そのため、ときには近隣諸国に傭兵として雇われ、堀を越えて城に侵入し、戦闘に加わったことが確認できる。伊賀・甲賀の自治は、織田信長軍によって壊滅的打撃が加えられるが、天正十年（一五八二）六月二日の本能寺の変後に、徳川家康が堺（大阪府）から伊賀・甲賀を越えて白子（三重県鈴鹿市）を経由して本拠地である岡崎（愛知県）に逃れる際、伊賀者・甲賀者は山中の護衛をしたほか、さまざまな戦いで家康の先陣をきって戦ったことにより、家康は伊賀者・甲賀者を取り立てることとなった。

天正十八年（一五九〇）八月一日、徳川家康が江戸に入府すると、伊賀者・甲賀者は江戸城下に住み、大奥や無人の大名屋敷などの警備、普請場の勤務状態の観察などを行うほか、寛永初年（一六二四）ころまでは隠密としても活動した。また鉄砲隊として甲賀百人組、伊賀百人組に編成され、百人番所に勤番で詰めて、江戸城大手三之門の警備を行ったりしたほか、諸大名が抱えることもあった。『軍法侍用集』などでは、伊賀者・甲賀者は忍びの中でも最も優れていると記述されている。江戸時代になって平和な時代が訪れると、戦闘をすることはなく、情報を得たり警護をすることが主な任務となり、隣国の政治状況を知って自国の政治に活かすということもしていた。忍者というと屋根裏に潜んで会話を盗み聞きするイメージがあるが、実際はその土地の人と仲良くなって情報を聞き出すことの方が多かったようである。

十七世紀中葉になると、忍びの方法や心構えなどを記した忍術書が書かれるようになった。